



▲三井田川伊田坑出土の刻印煉瓦
(上)戸畑耐火煉瓦製造所製(下)備前陶器製



▲炭鉱の刻印煉瓦



▲企画展のようす

▼三井田川伊田坑のボイラー室

(上)発掘調査で検出された基礎
(下)現役当時のボイラー室内



発掘調査で甦った 発掘された 炭鉱展

筑豊から炭鉱の灯が消えて30年が過ぎました。ヤマの風景は一変し、当時の面影はわずかに残る程度です。しかし、地中にはかつての炭鉱の痕跡が残されている場合があります。石炭・歴史博物館の夏季企画展(～9月5日(日))では、発掘調査でよみがえった炭鉱を紹介しています。

遺跡としての炭鉱

「文化財」という語句には、古い時代のものというイメージがあります。しかし近年では、よく聞く「近代化遺産」という言葉のように、明治時代以降の歴史的な資料も文化財として捉え、後世に残すべく貴重な遺産として保存されつつあります。

田川を含めた筑豊の歴史は、特に近代以降の石炭産業が重要な部分を占めます。そしてそれは、日本近代史の一ページともいえます。しかし、閉山後三〇年が過ぎた筑豊では、かつての炭鉱の面影が次々と姿を消していったため、幸運にも今に残された炭鉱の遺産は、歴史を語る上で欠かせない貴重な文化財となりました。

ところで、田川市の石炭記念公

園には、かつて筑豊炭田最大級の炭鉱があったことをご存知でしょうか。筑豊最大手、三井田川炭業所の主力だった伊田坑が同地であり、筑豊炭田の発展と日本の近代化に大きな貢献を果たしてきました。しかしながら今では、二本の煉瓦煙突と竪坑槽、一基が残されるのみで、炭鉱の姿を想像するには少し困難です。炭鉱跡を文化財として確実に後世へ伝えていくためには、炭鉱の全容を知ることが必要です。

そこで、田川市教育委員会では、伊田坑跡地を史跡(文化財の種類の一つ。遺跡として重要なもの)として保存活用を図るため、平成二二年度より炭鉱施設の基礎確認調査を行っています。炭鉱が遺跡として、発掘調査されたのです。

昨年度の調査では、二本煙突前のボイラー室の煉瓦基礎や、竪坑槽に伴う捲上室の基礎などが確認されました。これら付帯施設の存在が考古学的手法を用いた調査によって明らかになることで、煙突と槽の機能的な確認を得ることができ、今後とも随時発掘調査を行って、筑豊炭田を牽引した近代炭鉱の全貌を解明していきます。

企画展 「発掘された炭鉱」展

田川市石炭・歴史博物館では、

昨年度に実施した伊田坑発掘調査の成果を公開するとともに、他地域で同様に発掘調査された炭鉱を紹介する企画展を開催しています。

企画展では、筑豊の炭鉱で初めて蒸気ポンプの使用に成功し、筑豊炭田近代化の端緒となった目尾炭鉱(飯塚市)、捲上機台座が調査された鳳炭鉱(水巻町)、官営炭鉱として異彩を放った志免炭業所(志免町)における発掘調査の出土品や写真、約二〇〇点を展示しています。炭鉱の発掘調査では、炭鉱で使用していた鉄製品をはじめ、銅銭や薬瓶なども出土しており、炭鉱の姿が鮮明によみがえってきます。

炭鉱の刻印煉瓦

企画展展示資料の中から、特に煉瓦について紹介します。日本で煉瓦造の建造物が本格的に建設されたのは、明治時代以降です。海外からの輸入煉瓦を用いた洋風の建築物が、火事に弱い従来の木造建築に代わって建てられ、当時は近代化の象徴となりました。その後、外国人技術者の指導と在来の技術が融合し、国内でも煉瓦が焼成されるようになります。

煉瓦は炭鉱の施設にも多く使用されたので、発掘調査で大量に出土する場合があります。中には、製造会社の社名が刻まれた煉瓦が散見され、煉瓦をどこから調達し

たかがわかります。

大規模な炭鉱跡の発掘調査を行った志免炭業所では、戸畑耐火煉瓦製造所(北九州市)、荒木窯業(久留米市)など福岡県内で製作された煉瓦が数多く出土しました。加えて、備前焼で有名な岡山県備前市の三石耐火煉瓦など、県外からの仕入れも行っています。三井田川伊田坑では戸畑や三石とともに、備前陶器(備前市伊部や大阪(製々舎)製の煉瓦も出土しました。

一方、目尾炭鉱竪坑台座にみられた「大日本」の刻印をもつ赤煉瓦は、兵庫県神戸市の旧ハンター邸宅にて、製々舎の煉瓦とともに使用されていたようです。

当時は煉瓦を大量生産できる会社が少ないため、炭鉱でも全国各地から煉瓦を取り寄せ、施設に使用していたことがわかります。